

イネ紋枯病初発確認のために今やっておくこと

1. 紋枯病の初期病斑について



紋枯病の発生初期の病斑は意外と見つけにくいものです。

ごく発生初期の病斑は、最下位葉鞘の田面水位よりやや上に、暗緑色で水浸状の小斑点として現れます（左図）。やや進展すると病斑が拡大して、灰緑色となり緑褐色の縁取りを持つ病斑になりますが（中図）、緑色が残るため、まだ見落とししやすい状態です。さらに病勢が進むと、褐色の縁取りを有する灰褐色の病斑になり（右図）、紋枯病らしい鮮明な病斑になってきます。

暗緑色・水浸状の病斑が分かれば、早期発見が可能になりますが、この状態の病斑を圃

場全体探し回るのは大変な作業です。そこで「見るべき地点」を今のうちに確認しておきます。

2. 紋枯病の初発地点について

下の画像は、農業試験場内で、田植え直前の圃場の四隅を撮影したものです。水面上に浮いた「ゴミ」が右～右上方に偏っていることがわかります。紋枯病は代掻き時に水面上に浮遊した菌核が伝染源になります。このため、今、この「ゴミ」の多い地点が初発地点になります。

県内の紋枯病初発は、おおむね6月下旬～7月上旬に確認されます。6月20日を過ぎた頃から、このゴミの溜まっていた位置を集中的に確認してください。もちろん、「ゴミ」には菌核が含まれていますので、「ゴミ」の除去は紋枯病の伝染源の除去にもつながります。

今のうちに、「ゴミ」が溜まっている場所を確認しておいてください。

